

ティーチング・ステートメント

所属 理学療法学科
名前 佐藤 洋一郎
改訂日 2024年2月26日
(作成：2020/09/09)

【責任】

理学療法学科に所属し、専門科目のうち解剖学（1年生）、物理療法学・運動療法学演習（2年生）、予防と介護（3年生）および臨床実習に関する施設管理や施設への文書送付、実習の要項修正などを担当している。高大連携教育推進委員会の委員として、高校と大学の接続をスムーズにするための公開講座等の設定や選定を担当している。学部生に対して卒業研究のためのゼミ生の実験や論文執筆、発表用スライドの指導を担当している。大学院の修士課程では、主査として実験設定や論文執筆の指導を担当している。10期生（2024年度入学生）の担任をしている。

【理念】

理学療法分野での対象者は、同じ疾患であっても人によって症状や原因は違う。治療方法やその原因についての正解は1つではないため、学生は持っている知識を使って自分で考える習慣を持つべきである。決まっていることだけを実行するのではなく、自分で思考して知識をつなぎ合わせたり、新たな概念を作り出したりするためにはどれほど深くまで物事を探求できるかが重要である。

そのためには、物事の本質を常に考える姿勢が必要であるため、教科書や論文などに書かれていることを基礎知識に基づいて説明する習慣を身につけさせる。

また、大学は専門性を身につけるための高等教育機関であると同時に、社会にでるための最後の教育機関でもある。社会人としての素養をきちんと身につけさせることも、時代の流れとして大学に求められていることであると考え、社会人に適した振る舞いを学生に求めるようにする。

【方針・方法】

理念を達成するために、大きく3つの方針を立てた。「基礎知識を定着させる」、「知識を使って説明する機会を作る」、そして「社会人としての振る舞いを教示する」である。

「方針1：基礎知識を定着させる」

- 担当している解剖学系において、知識の確認や定着をするための小テストや定期テストを設定する。
- その小テストや定期テストの基準を明確化し、明確な「壁」を作る。
- 基準に満たない場合は、断固として再履修させる。

「方針2：知識を使って説明する機会を作る」

- 授業の中で、1回はでてきている現象や症状について基礎的な学問に基づいて説明する機会を作る。
- レポートなどを課すことで、説明する内容を文章化する機会を作る。
- グループワークの機会を作ることで、説明や文章化をピアレビューできるようにする。
- グループワークによって、お互いに説明し合う機会を増やす。
- グループワークの場面を作ることで、他者の評価をふまえて自分の考えを内省させて自己変革を促す。

「方針3：社会人としての振る舞いを教示する」

- 日々の教員に対する態度や授業に臨む姿勢について、他人からの見え方を事前に伝えた上で、適宜指導する。
- 担当である臨床実習において、学外の指導者に対する対応の仕方をしっかりと事前に指導する。
- 実習中における他者の指導者からの評価や報告内容に基づいて、自分の振る舞いを内省させる。

【評価・成果】

- 解剖学において、成績上位者が増えた。一方で、成績低迷層も一定数おり、二極化が強くなった。
- 卒業研究の内容を発展させて、全国学会などで発表するゼミ生がいる。
- 大学院生の研究内容が全国誌に受理され掲載された。
- 大学院生の研究内容が、全国規模の学会で採択され、口頭での発表を行った。
- 就職後の進路変更学生が減少傾向である。

【目標】

短期目標：

- 小テストの正答率を活用して、自己の理解度の振り返りをする機会を作る（2025年3月）
- 授業アンケートにおいて、目標を十分に達成できたと回答する人数を増やす（2025年3月）。
- 明確な正解のない問いや疑問に対して、学生間での活発な意見交換を促す授業を展開する（2025年3月）
- 解剖学において成績上位者の人数を増やす（2025年2月）。
- 演習科目において、他の学生と協力する機会を作り、ピアレビューを行う機会を作る（2025年2月）。

長期目標：

- 研究に関心をもち、臨床現場においても科学的に理学療法を考える卒業生を増やす。
- つまり、学会への発表や研究活動を継続する卒業生を増やす。
- 大学院への内部進学者を増やす。
- 卒業生や大学院生が自分で論文を書けるようになる。
- 働くことに対して、内発的にその意義を見出すことができる卒業生を増やす。